

ヴァージニア・ウルフの始まりと終わりの地

——セント・アイヴスとロドメル——

石川 玲子

1. はじめに

二十世紀初頭の英国作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf 1882-1941) にとって、コーンウォール州の小さな海辺の町セント・アイヴスとイースト・サセック州の小村ロドメルは、特別な場所であったと思われる。ウルフの幼少期において、セント・アイヴスのサマーハウスで、数か月間の夏の休暇を過ごすのが、ウルフの家族の毎年の恒例となっていた。彼女は『存在の瞬間 (Moments of Being : 以下 MOB)』の中に収められた回想録「過去のスケッチ (“Sketch of the Past”)」のなかで、彼女にとっての最初の思い出が、セント・アイヴスに結びついたものであったことを語っている。その思い出とは、セント・アイ

ヴスとロンドン間の列車の中で、母の膝の上に載せられているときに目にした母のドレスの花模様であり、セント・アイヴスの子供部屋でまどろみながら聞いた、引いては打ち寄せる波の音や、風に吹かれたブラインドがその小さなどんぐり玉を床の上で引きずっていく音、そしてその音を聞きながら恍惚感に浸った思い出であった。そして、それらは自分にとって「一番大切な思い出」であり、もしも人生がその上に立つ「土台」を持つとすれば、彼女の人生は「疑いもなくこの思い出の上に立っている」(MOB 98)とウルフは書いている。

その回想録は一九三九年四月から一九四〇年十一月に書かれたが、実はその間に、ウルフと夫レナードは、ロンドンの家が第二次世界大戦による爆撃によって損壊したた

め、一九一九年以來週末や休暇を過ごすための家であったロドメルのモンクス・ハウス (Monk's House) に移り住んだのだ。ウルフは回想録を書き終えた四か月後、近くを流れるウーズ川に身を沈めて自らの命を絶つ。こうして、モンクス・ハウスは彼女にとって生涯最後の家となった。

このようにウルフの記憶の始まりにあるセント・アイヴスと、彼女が最後に住んだ地であるロドメルは、ウルフにとつてどのような意味を持つ場所であったのだろうか。その意味を探ることは、作家ウルフについての理解、さらには彼女の作品の理解へとつながるものとなるはずである。

2. セント・アイヴスとタランド・ハウス

ウルフの父がセント・アイヴスを一家の夏の休暇を過ごす場所として選んだ経緯については、「過去のスケッチ」の中で詳しく説明されている。ウルフの父レズリー・ステイブン (Leslie Stephen) は『英国人名辞典 (Dictionary of National Biography)』(1881) の編纂主幹であったことでも知られる文芸批評家・歴史家であったが、また「英国山岳会 (The Alpine Club) の会長も務めた山岳家であり、

かなりの健脚であったようである。その彼が一八八一年に「いつもの徒歩旅行の途中で」「セント・アイヴスを発見」し、GWR (グレート・ウェスタン鉄道) の所有するタランド・ハウス (Talland House) が貸家として出されていることを知った。「それはセント・アースからセント・アイヴスまでの鉄道が開通した最初の年だったと思う」(MOB 12) とウルフは書いているが、この鉄道支線の敷設は一八七七年のことであるので、ウルフの勘違いであろう。いずれにせよ、その鉄道の敷設を機にセント・アイヴスは観光地・保養地として人を集めるようになったのであり、ウルフの父はまさにその先便を切った者の一人だったということになる。彼は、「湾の美しさに魅せられ」、またおそらく「当時の気楽さ、余裕」も後押しして、すでに養うべき大家族がある上に、翌年新たに子供が生まれる予定であったこと(その子供がヴァージニア・ステイブン、すなわちウルフである)に加え、「イングラランドの端から端まで」(MOB 127) 家族や使用人たちを移動させるには費用が高む、ロンドンから遠く離れている(実際ウルフたちの家族は年に一度しか訪れることができなかった)といった、いくつかの問題にもかかわらず、その家を借りることにした

のであった。ウルフは「ふり返ってみると、私たちの子供の時の経験の中で、コーンウォールの夏ほど重要だったものは恐らくないだろう」(MOB 127)と述べ、さらに「父と母は、タランド・ハウスを借りた時、いつまでも消えることなく、この上なく貴重な贈り物 (what has been *perennial and invaluable*) を私たちにくれたのだ」(MOB 128)と記している。しかしながら、一八九五年の母ジュリアの死によって、タランド・ハウスの借地権は他人に譲られ、「母が存在させていた楽しい、多様な家庭生活は永遠に閉じてしまった」(MOB 93)のであり、「セント・アイヴスは永遠に消え去った」(MOB 136)のである。

ウルフがその後タランド・ハウスを目にしたのは、一九〇五年夏のことである。それは父を亡くした翌年であり、二十代の四人の兄弟姉妹たち、ヴァネッサ、トビー、ヴァージニア、エイドリアンはセント・アイヴス湾の一部をなすカービス・ベイ (Cardis Bay) の家を借り、母の死から十年ぶりにセント・アイヴスを訪れた。ロンドンから到着した日の夜、彼らはカービス・ベイから数マイルの坂道を歩いてタランド・ハウスを見に行っている。親しい友人であったヴァイオレット・デイキンソン宛のウルフの手紙に

は、暗がりの中でタランド・ハウスに近づき、エスカロニアの生垣の間から、まるで「幽霊のように (It was a ghostly thing to do)」中を覗いたこと、そこは全く変わっていないかったこと、出会った年配の人たちに彼らが浜辺で遊んでいたのを覚えていると話かけられたことが、書かれている (Letters 1, 246, 203-4: Letters は以下 L と記す)。

一方、同じ出来事を記録した彼女の日記には、生垣の向こう側の灯りのついた建物がもはや自分たちのものではなく、自分たちはそれ以上先に行くことはできず、もしもその生垣の向こう側に入ろうとしたならば「魔法 (the spell)」がとけることを、自分たちは知っていたと書いている (‘Cornwall, 1905’, PA 282)。Hermione Lee は『ウルフ研究の金字塔とも言うべき伝記『ヴァージニア・ウルフ』において、このタランド・ハウスの再訪が、その約二十年後に書かれる『灯台へ (To the Lighthouse)』の「感情とプロットの源」(Lee 22)となったであろうことを指摘する。Lee が示唆する通り、『灯台へ』の中で、画家リリー・ブリスコーが十年ぶりにラムゼイ家の別荘にやってきて、絵を描くことを通して過去へと遡り、ほんの一瞬、亡きラムゼイ夫人の生前の姿を呼び戻したように (To the

Lighthouse 192)、薄暗がりの中で生垣の外に立っていた四人の兄弟姉妹は、生垣の向こう側に、彼らの子供時代の夏の光景、幼い自分たちや大人たちの楽しげな様子とその中心に居る母ジュリア・ステイブンの姿を見ていたのではなからうか。

『灯台へ』はスコットランドのヘブリディーズ諸島を舞台としてはいるものの、実際はウルフの子供時代のセント・アイヴスの記憶をもとにしている。四十代半ばのウルフが、この作品のなかに両親の姿を蘇らせようと試みたこと、そしてそれを書くことで、長年の間彼女につきまとっていた両親、とくに母に対する複雑な思いを解き放つことができたと彼女が日記に記したことはよく知られている。

実際、ラムゼイ家の別荘が海を見下ろす小高い場所に建っていること、その家の前には芝生があつて、その芝生の端からは大きな湾とその沖合の灯台が見渡せることは、タランド・ハウスとセント・アイヴスの風景そのままである。以下は、夫の弟子であるタンズリーを伴って町に出かけたラムゼイ夫人が、目の前に広がる湾のながめに感嘆する場面である。

・ ・ ・ ・ ・
ここで町の家並みが途絶え、波止場が見えてきたと思うと、突然目の前に湾全体が大きく広がり、思わず夫人は「まあ、なんてきれいな！」と声をあげた。巨大な水盤を満たしたような一面の青い海が眼前に横たわり、その中央に灰白色の灯台が、遠く、巖かにそびえたっていた。右手の方には、風になびく野草の生えた緑色を帯びた砂丘が、霞んだりくぼんだりしながら、なだらかなひだを描きつつ果てしなく続いていて、見るたびにいつも、人の住まぬ月の世界に通じる道を偲ばせるのだった。この景色なんですよ、と夫人は足を止め、目の灰色を募らせながら言った。夫が何よりも愛しているのは。

(To the Lighthouse 11-12; 御興訳 23-24)⁽²⁾

セント・アイヴスを訪れた者は、今日においても、まさにここに描き出された風景と寸分たがわぬ広い湾と青い海と灯台、そしてなだらかに続く陸地が溶け合った静謐で美しい風景を目にすることであろう。実は、タランド・ハウスは今でもセント・アイヴスの海を見下ろす丘の上に立っており、現在は何人かの人が住む集合住宅になっているら

しい。外観や周囲の様子は、ウルフの家族が夏を過ごした当時の写真と比べても、さほど大きく変わってはいないように思われる。もともと、当時でさえ、ウルフの母ジュリアの亡くなる二、三年前には、看板やホテルが湾の眺望を妨げるようになっていたことが「過去のスケッチ」からわかる。今ではその眺望がさらに狭まっているものの、ランド・ハウスの庭の芝生からはまだ海と沖合に立つ灯台——ゴッドレヴィ灯台 (Godfrey Lighthouse) ——を見晴らすことができるのである。

ゴッドレヴィ灯台は近くを通る船舶のために、今も光を送っている。現在はゴッドレヴィ灯台の塔からではなく、岩に設置されたLEDが光を発しているが、ウルフの時代には灯台の光は二人の灯台守によって操作されており、その光は十七マイル(約27km)先まで届いたそうである。『灯台へ』では、ラムゼイ夫人が灯台守の孤独な生活に思いを馳せ、灯台守の子供に贈るための靴下を編んでいる。次の引用における、ラムゼイ夫人が眺めた、灯台の光が波の上で踊る様も、恐らく幼いウルフの記憶に刻まれた風景なのであろう。

昼間の光が薄らぐにつれて、荒波はさらに明るく銀色に染まり、海の青さがかき消えると灯台の光は澄んだレモン色の波となつてうねり、波は丸くなって盛り上がつては浜辺に碎け、それを見る夫人の目には恍惚感があふれ、純粹な歡喜の波が心の底を駆けめぐつて、彼女はもうこれで十分、これで十分だわ、と感じた。

(To the Lighthouse 6: 御興訳 120)

リリー・ブリスコーがラムゼイ家の屋敷と庭を十年後にもう一度描き直したように、ウルフは「自分の見たセント・アイヴス (her own 'views' of St Ives)」を、生涯何度も書き直したのだとLeeが述べるように (Lee 28)、ウルフの心の中にあるセント・アイヴスの記憶は、『灯台へ』のみならず他の作品の中にも様々な形で織り込まれている。例えば『灯台へ』の前作『ダロウエイ夫人 (Mrs Dalloway)』において、クラリッサ・ダロウエイがその日のパーティーのための花を買いに出かけようとする冒頭の場面で、若い頃の思い出の地ブアトン (Bouton) の記憶がロンドンの朝のすがすがしい空気によつてよみがえる様が、以下のように描かれる。

・ ・ ・ なんてすてきな朝だろう。海辺で子供たちに吹きつける朝の空気のようにすがすがしい。

なんていう晴れやかさ！ 大気の中へ飛び込んでいくこの気分！ プアトンの屋敷でフランス窓を勢いよくあけ、外気の中へ飛び込んで行つたとき！ いつもこんな風を感じたものだった。今でもあの窓の蝶番の少しきしむ音が聞こえるようだ。早朝の空気はなんとすがすがしく、穏やかだったことか。もちろんここよりずっと静かだった。ひたひたと打ち寄せる波のように、その波の接吻のように、空気は冷たく、刺すようで、しかも（あの時十八だったわたしには）厳肅な感じがした。開け放つた窓のところに立ちながら、私は何か恐ろしいことが起こりそうだと感じていた。そして花や、木々からほどけながらのぼってゆく煙や、飛び立っては舞い降りるミヤマガラスをながめていたのだった。

(Mrs Dalloway 1 : 丹治訳 12-13)⁽³⁾

「海辺」の朝の空気、「ひたひたと打ち寄せる波」はセント・アイヴスの海を、開け放たれた「フランス窓」はタラント



ゴッドレヴィ灯台



現在のタラント・ハウス

ド・ハウスの正面の二つのフランス窓を、そして「花や木々」、「ミヤマガラス」はたくさんの木と花の生い茂り、鳥の声が聞こえるタラント・ハウスの庭を想起させる。恐らく、この場面を描くウルフの脳裏には、幼少時のセント・アイヴスとタラント・ハウスの記憶が鮮やかにはつきりと映し出されていただろう。ウルフにとってセント・アイヴスは、クラリッサにとつてのプアトンがロマンチックで幸せな青春時代を意味していたのと同じく、母の愛に満ちた幸福な幼年時代、その大切な過去の記憶を象徴する場所であったに違いない。

3. ロドメルとモンクス・ハウス

ウルフと夫レナードがモンクス・ハウスを購入したいきさつには、ちょっとしたエピソードがある。一九一九年、ウルフはイースト・サセックス州のルイス近郊で、週末や休暇を過ごすための家を探していた。それまで借りていたアッシュム・ハウス (Ashham House) のリースの更新が、持ち主の都合でできなくなったためである。ウルフは姉ヴァネッサとの口論の後沈んだ気持ちでルイスの町を歩いていた時に、古い風車を造り変えたラウンド・ハウス (the Round House) が売りに出ているのを見つけ、衝動的に三百ポンドを支払った。名前の通り丸い (round) 小さな家で、二週間後にウルフと一緒にその家を見に行った夫レナードはその家が手狭すぎると感じたようだ。彼らはその帰りに、ロドメルのモンクス・ハウスがオークションに出されているのを知る。彼らは以前から、その家を散歩の途中に見て知っており、その広い庭や果樹園をうらやましく思っ眺めていたのだ。翌日自転車に乗ってモンクス・ハウスを見に行ったウルフは、その家を手に入れたという思いを一層強くしたようである。ウルフの中に生じ

たモンクス・ハウスへの熱情とそれを抑えきれずにいる様子は彼女の日記からも伝わってくるが、その姿はかつてタランド・ハウスを初めて見たときのレズリー・ステイブンの興奮に比すことができる (Lee 423)。ウルフとレナードは、結局ラウンド・ハウスを売りに出し、モンクス・ハウスを七百ポンドで競り落とした。

こうして手に入れたモンクス・ハウスは、当初は電気も水道もなく、トイレは木立の中にしつらえた土を掘っただけのものであったが、そのような不便な生活を強いられたいも関わらず、ウルフがその家を買ったことに満足し、そこでの生活を大いに楽しんでいることが、彼女の日記や手紙から伺える。そこにはモンクス・ハウスの庭から見晴らせる water meadow (川の氾濫によって肥沃に保たれた牧草地) の眺めや周囲に広がる「ダウنز (downs; South Downs)」(イングランドの南部と南東部になだらかに続く草地の丘陵地帯) の魅力、広い庭で果物や野菜を収穫する喜びが綴られている。モンクス・ハウスに移って二週間目の九月一四日の日記には、庭での時間が多くなってしまったので、日曜と水曜はウォーキングの日と決めたことが記され、その日 (日曜日) はイギリス海峡に出て、ブライトン

とイーストボーンの間広がる海と背後のダウンズが織りなす美しい風景を眺めた喜びが表現されている (*Diary*, 14 September, 1919, I 298: *Diary* は以下 D と記す)。

モンクス・ハウスは、ウルフが亡くなるまでの二十二年間、ウルフとレナードに多くの喜びを与えた。ウルフの作品からの収入により経済的な余裕ができる度に、彼らは家の設備を整え、モンクス・ハウスは居心地の良い家へと変わっていった。また最初から二人を魅了した庭も、レナードの庭造りの情熱によって、一層素晴らしい庭へと変化した。ウルフも雑草を抜いたり、リングの収穫をしたり、レナードが作業する間梯子を支えたりと、レナードを手伝ったようである。そうした庭仕事の充実感はウルフに「これこそ幸せというものだ (this is happiness)」 (*D*, May 31, 1920, II, 43) と言わせている。もともと、彼女の日記や手紙からは、そうした気晴らしと同時に、彼女の頭の中に執筆に関わる様々な考えが常にあり、作品を書いたり、本を読んだり、書評を書いたりという仕事はモンクス・ハウスでの彼女の生活においても大きな比重を占めていたであろうことが伺える。しかし、そうした精神活動とは対極にある庭や自然との情動的な対話もまた彼女にとっては大

切なものであったに違いない。

実際ウルフがロドメルやルイス周辺のウォーキングで出会った風景やモンクス・ハウスの庭を描く時の豊かな情緒あふれる文面は、彼女がそれらからいかに多くの喜びと純粋な幸福感を得ていたかを示している。例えば、一九二五年九月一日に友人に宛てた手紙の中で「私たちの庭はサセックスの羨望の的です (Our garden is the envy of Sussex)」と述べ、それが夫レナードの手柄であることをユーモラスな筆致で書いた後、次のように続けている。「本当に、暑い日の庭ほど美しいものはないと思います。中年になってこんな素朴で当たり前のことを心の底から口にするなんて。 (Really, I don't believe anything so lovely as a garden on a hot day. In one's middle age one says these simple and commonplace things with profound conviction.)」 (*L*, III, 1575, 202) クラリッサ・タロウェイが六月のロンドンの通りを歩き、街の賑やかな活気を感じ取りながら「このすべての中に私の愛するものがある」 (*Mrs Dalloway*, 2: 舟治訳 14) と言ったように、ウルフはロンドンの喧騒と活気をこよなく愛したが、一方、モンクス・ハウスの自然に包まれた静かな生活も彼女にとってなくてはならないものであったに

違くない。モンクス・ハウスとロドメルはウルフにとって、ロンドンでの忙しい日常から隔てられた、安らぎと純粹な心の喜びを与えてくれる大切な場所であつたのである。

ウルフは、アッシュヤム・ハウスを借りる前に、同じイースト・サセックスのフェアル (Fie) の家を借りており、その家を「リトル・タランド・ハウス (Little Taland House)」と名づけている。その後には彼女の田舎家となつたアッシュヤム・ハウスとモンクス・ハウスがリトル・タランド・ハウスと同じイースト・サセックス州のルイス近郊の田舎家であつたことを考えても、これらの家はある意味でリトル・タランド・ハウスの後を継ぐものであり、それから三つの家はウルフにとって、幼少時代に過ごしたタランド・ハウスの幸福でロマンチックな記憶につながる空間としてあつたのではないだろうか。

興味深いことに、「過去のスケッチ」の中でセント・アイヴスの思い出と、モンクス・ハウスの庭の情景が、しばしば交じりあつて描写されており、二つの世界が溶け合っているかのような印象を生みだしている。そのような箇所を以下に二つ引用する。

(1)・・・それらの瞬間——子供部屋の中や、浜辺に行く道すがらの瞬間——は、現在という瞬間よりもなほ一層現実的なものと感じられることがある。このことを私はまさに試したところだ。というのには私は起きて庭を横切つていったのだ。パーシーがアスパラガスの畑を掘つていた。ルイが寝室のドアの前でマットを振つていた。しかし、私は彼らをここで見た光景——子供部屋と浜辺に通じる道——を通して見たのである。時おり、私は今朝よりもつと完璧にセント・アイヴスに戻つていける。(MOB 67)

(2)・・・セント・アイヴスは、今の瞬間私の目の前にあるのと同じ「純粹な喜び」を与えてくれた。楡の木のレモン色の葉、果樹園のリンゴ、木の葉がさわさわと揺れる音は、私を立ちどまらせ、人間以外のいかに多くの力が私たちに影響を与えるかを考えさせる。私がこの文を書いている間にも光は変化し、リンゴは鮮やかな緑色になり、私は反応する、どんな風にならぬか。(MOB 133)

ウルフはこれらの回想録をモンクス・ハウスで書いてい

る。したがって引用(1)では、モンクス・ハウスの庭を横切りながら、ウルフは庭師パーシーと家政婦ルイの姿を目にしたのである。しかし、彼女の心の目にはセント・アイヴスの子供部屋や浜辺の道の記憶があまりに鮮明に現実感をもってよみがえっており、目の前の情景の方がその記憶を通して見えているのだ。引用(2)では、ウルフの思考は「純粹な喜び」という共通の感情を媒介に、過去のセント・アイヴスから現在のモンクス・ハウスへと移行し、モンクス・ハウスの庭の榆の木の葉や果樹園のリンゴに及んでいる。

ウルフは先の引用において、記憶と現在の知覚との関わりについて考えているため、記憶の中のセント・アイヴスと現在のモンクス・ハウスが同時に言及されるのは当然だとも言える。しかし、それがセント・アイヴスについての記述なのか、モンクス・ハウスについての記述なのか、注意深く読まなければわからないような書き方をしているところに、セント・アイヴスの思い出をモンクス・ハウスの生活にいつのまにか重ねあわせている、ウルフの無意識を見出すことができそうである。つまり、セント・アイヴスとモンクス・ハウスはウルフの心の中のとどこかでつながっ

ているのではなからうか。そのことについて、現在ナシヨナル・トラストが所有するモンクス・ハウスのテナントである Caroline Zoob は、『波 (The Waves)』の各セクションを分けるインタールード、すなわち夜明けから夕刻まで太陽が移動しつつ、海や庭に光を注ぐ様を描いた文章を取り上げて、それらが「モンクス・ハウスの庭特有の音とランド・ハウスの海の音の反響に満ちて」いると述べ、「ウルフはモンクス・ハウスの庭を見る時、いつもタラド・ハウスの庭の記憶のプリズムを通して見ていたのだ」(Zoob 83) と指摘している。

4. ロドメルとモンクス・ハウスでの社交

前節で見たように、モンクス・ハウスは、ウルフにとつて、ある意味で、セント・アイヴスの記憶につながる安らぎと幸福を感じさせてくれる場所として機能していたと思われる。しかしながら、ウルフの記憶の中でいつまでも色あせず、完結した一つの世界としてあるセント・アイヴスとタラド・ハウスは、彼女の幸福な子供時代を象徴する、言わば、閉じられた「エデンの園」である。それに対して、ロドメルとモンクス・ハウスは、ウルフにとってロ

ドメルの人々たちやモンクス・ハウスを訪れる友人との関わりなしには成り立つことのない空間でもあった。ウルフとロドメルの村の関係については、Hermione Leeが彼女の伝記の中ですでに洞察に富む詳細な説明を付しているが、それらを再検討してみると、ロドメルの村や村人たちに対するウルフの複雑な感情が見えてくる。

ウルフにとってのモンクス・ハウスとロドメルの魅力の一つは、恐らく自然に根差したイギリスの伝統的な田舎の生活がそこにあることであつただろう。モンクス・ハウスについての最も古い記録は一七〇七年で、以来ウルフ夫妻が手に入れるまでに四つの家族がその家を受け継いできた⁽⁴⁾。ウルフ夫妻は、前の持ち主 Jacob Berrill の所有物の中から、いくつかの家具や庭仕事の用具の他に、Berrill の前の住人であつた Gratzbrook 家の家族画を三点購入した (Lee 424)。彼らがそれらを手に入れたのは、その絵自体に惹かれたことが一つの理由であつたと考えられるが (L II, 1075, 384)、加えてモンクス・ハウスの歴史に対する敬意をそこに読み取ることも可能であろう。Zoob は、レナードの言葉を引いて、ウルフとレナードが、「人々の生活が穏やかに続いている」という考えに魅了され、「彼ら

の前に住んでいた人々」が「それぞれの役割を果たすことで、モンクス・ハウスの家や庭の静かで平和な空気を生みだしていると信じていた」と述べている (Zoob 11)。これは現在のモンクス・ハウスに住む Zoob ならではのコメントであろう。

モンクス・ハウスのあるロドメルの村の伝統やコミュニティも、ウルフをひきつけるものであつたようだ。夜の十時ごろに使用人のロティを探しに出た時に、パブから戻る男たちから口々に “Good nights” (原文ママ) とつつもの昼間よりも多く挨拶を受けたこと (D, 17 August, 1920, II, 59) や、誰もが毎日決まった時間に決まったことをし、夜になるとランプをともし、夕暮れの光をながめるといふ素朴な村の生活の魅力 (D, 1 October, II, 71) を、ウルフは日記に記している。一方で、村の結婚式を、イングランドの田舎に残る歴史と伝統に深く心を動かされながら、壁に寄りかかって、「少し離れて、何のつながりもなく (detached, unconnected)」 (D, 22 September, 1928, III 197) 眺めているウルフとレナードの姿は、ロドメルの村の生活に魅了されつつも、彼らが村のコミュニティの外側にいる外来者であることを象徴している (Lee 430)。

そのようなウルフと村の人々とのつながりは、彼らがモンクス・ハウスを田舎の住まいとした初期の頃においては、一つには料理人や庭師の職を村人に提供する「雇用主」として (Lee 431)、もう一つはモンクス・ハウスの庭で取れる野菜やフルーツ、花を分けたり、売ったりすることを通して、生まれてきたようだ。モンクス・ハウスに移って間もない一九一九年九月一四日の手紙には、梨の熟れ具合を見て庭にでたり、ジャガイモを収穫して量ったりしている様子と共に、村の葬式のために、やってきた村人に庭の花を切り花にして分け与えることもあったことが語られている (D, 14 September, 1919, II 390)。庭から収穫されたたくさん野菜やフルーツはウルフや友人たちを楽しませるだけでなく、その余剰分がルイス婦人会 (the Lewes Women's Institute) のマーケットに持ち込まれる (Zoob 37) などして、絶えず地域の人々にも分けられたことは、ウルフの日記や手紙の記述から伺える。また、時を経るうちに、ウルフとレナードは村のコミュニティに深く関わるようになっていった。ウルフは婦人会の集会で講師を務めたり、友人や知人を講師として紹介したりもしたようだ (Zoob 148)。

しかしながら、村のコミュニティとの隔たりは、ウルフの意識の中に常にあつたようである。モンクス・ハウスの隣に建つ教会から「断続的で不愛想で説教じみた (intermittent, sullen, didactic) 鐘の音が響き、集まった人々のざわめきがすぐそばに聞こえること、あるいはそばの小学校の子供たちが校庭で遊びながら甲高い声を発したり、モンクス・ハウスのリンゴを盗んだりすることは、ウルフの苛立ちの源であつた (Lee 427-8)。また、ルイスやロドメルの「社交 (society)」に対する「彼女のどうしようもない見下した態度 (her incurable condescension)」 (Lee 432) が、彼女の日記の中の「自由な考えを持つ自分たち (we free thinkers)」と「無教養な人たち (those simple natures)」とを分け隔てる辛辣な言葉に現れてくる (D, 17 August, 1920, II, 59)。一方で、ウルフは、一九三〇年代に目立って増えた中産階級の新参者——ロドメルやルイス周辺の立派な家屋や土地を相続や買収によって入手し、そこに現代的な生活を持ち込んで田舎の自然と伝統を損なう人々——を嫌悪し、彼らと同一視されることを嫌った (Lee 431-2)。こうした、ロドメルやルイスの人々に対するウルフの反応には、知識階級としてのプライドとスノビ

ズム、そして伝統的な田舎の生活への愛着が絡まり合った複雑な内面を読み取ることができる。

結局のところ、ロドメルでのウルフとレナードの社交は、実質的には彼らを訪ねてやってくる親戚や友人たちとの交流に限られていたと言える。残存するウルフの手紙をまとめた Nigel Nicolson 編纂の *The Letters of Virginia Woolf* (6 vols.) に三七一〇通もの手紙が収められていることが示す通り、ウルフは社会的な面を持ち、友人や親戚とのつながりを大切にしていた。モンクス・ハウスについても、庭と風景の美しさや、収穫した野菜や果物、はちみつと訪問を促している。しかし一方で、ウルフは日記に「実を言うと、実際に人が来たとき私は嬉しく思うが (I like it)、帰るときにはもっと嬉しい (I love it)」(D, 23 September, 1933, IV, 179) と書いてゐる。また、ブルームズベリーのグループのメンバーの一人であった E.M. フォスターの、モンクス・ハウスで「一人で放っておかれた」とくに不満を漏らす友人への手紙も残っている (Lee 433) ように、体調や気分、さまざまな事情にもよったことだろうが、彼女がモンクス・ハウスの訪問客をいつも歓待した

わけではなかったようだ。

このように見えてくると、モンクス・ハウスでの生活において、ウルフは友人たちとの交際を自分から求め、またロドメルの村人との関わりが介入することも避けられなかったが、結局のところ、ロドメルの田舎生活と自然を味わいながら過ごす、静かで孤独な時間こそが、ウルフにとって、モンクス・ハウスの真髄ともいべきものだったのであろうと思われる。

ウルフがモンクス・ハウスを購入した三年後の一九二一年に、庭の一角にある道具小屋を改造した小さな部屋が出来、彼女はそこで原稿を書くこともあった。一九三四年にはそれを取り壊して、果樹園と牧草地へと開けた芝生の庭との境に、新しい執筆のためのライティング・ロッジを建て、以降は体調の良いときは毎日庭を通ってそのロッジに行き、原稿や手紙を書いた。エセル・スミスへの手紙には、そのような静かな一日の始まりについて次のように描写している。

・・・赤いバラの香りを嗅ぎ、なだらかに盛り上がった芝生を横切って(まるで頭の上に卵の入った籠を載

せているようにゆっくりと歩き)、たばこに火をつけ、ライティング・ボードを膝に置き、まるでダイバーのように、とても注意深く、昨日書いた最後の文の中に身を沈めるのです。

(L IV, 2244, 223; Zoob 119)

この手紙の終わり近くには、このような「孤独 (solitude)」を喜び、人と会う予定が詰まった日を呪う気持ち(=this detestable disease of seeing people)、ライティング・ロッジができた翌年にそのロッジ前に作られたレンガ敷のテラスは、デッキチェアに座って友人たちと語り合う社交場ともなったのだった。このようなウルフの姿は、クラリッサ・ダロウエイの相反する志向を、すなわちパーティを開くことで人と人を結び付けることに喜びを感じる一方で、「魂の孤独 (privacy of the soul)」への強い執着を持っていたことを思い出させる。ウルフのライティング・ロッジは、クラリッサが孤独に向き合う屋根裏部屋あるいは広間の隣の小部屋に当たるものだったと言えるだろう。

第二次世界大戦が勃発し、ロンドンの家に住めなくなっ



モンクス・ハウス



ライティング・ロッジと果樹園

たウルフはレナードと共にモンクス・ハウスに完全に住居を移したが、戦火が激しくなるにつれ、静かなロドメルにいても、飛行機や爆撃の音に驚かされ、「モンクス・ハウスはもはや平和な田舎家 (a peaceful retreat) ではなくなつて」(Zoob 148) しまう。このように見ると、そのようなモンクス・ハウスを後にして、ウーズ川に身を沈めたウルフの死は、彼女の最後の孤独と静けさへの希求を象徴しているようにも見えるのである。

5. おわりに

以上に見てきたように、ウルフの中の矛盾する様々な思いや性向が、彼女の最初の記憶に刻まれたセント・アイヴス／タランド・ハウスと、最後の住居となったロドメル／モンクス・ハウスとウルフの関わりから見出すことができる。こうした場所や家との関わりから見えてきたウルフの様々な感情や心性を、もう一度作品に戻って考えてみることで、また新たな読み、新たな発見があるのではないだろうか。

それにしても、このようにウルフにとって大切な場所が、ウルフの死後七十年以上が経った今日においてもなお、大きな変化を被ることなく残されているというのは素晴らしいことである。私は昨年、その二つの土地と家を訪れて、作家が見た風景や過ごした空間の中に身を置くことが、作家の魂に近づくために、作家が残した文章を繙くのととはまた異なった、意味のある方法であるということを強く感じた。タランド・ハウスとモンクス・ハウスは、今なお住居として使われている。特に、モンクス・ハウスは、ナシヨナル・トラストから家を借り受けたテナントが一階

の一部と二階を住居として使用しているものの、一階の大部分はウルフが暮らした時のまま保存され、週に二日一般公開されており、生前のウルフの生活を思い描くことができる。しかも、ウルフ夫妻の誇りであった庭は手入れが行き届き、木の葉のそよぎや色鮮やかな花の輝きに彼らの生前の息づかいが感じられるような気がするのである。

私がモンクス・ハウスを訪れた日には、ウルフの最後の作品『幕間 (Between the Acts)』の一シーンの朗読劇が、ライティング・ロッジ前の芝生の上で演じられ、ウルフの作品世界に迷い込んだような、記憶に残る貴重な体験をすることができた。ウルフは一九四〇年四月六日の手紙に、「婦人会から村人が演じる劇を書いて、プロデュースしてほしいと頼まれた」、「もしできたらやってみよう」と書いている (L VI, 359f, 391)。Nicolson がその手紙の注に書いているように、結局それは実現しなかったが、ウルフができなかったことを、『幕間』のミス・ラ・トローブが成し遂げている (L VI, 391)。

彼女の死後に出版された『幕間』は、一九三九年第二次世界大戦勃発の直前の、イングランドの小村にあるポイント・ホールと呼ばれる屋敷を舞台とし、作品中、その屋敷

の庭では村人の野外劇が行われる。この作品が書き始められたのが、ウルフがモンクス・ハウスに完全に移り住んだのとはほぼ同じ時期であったことから想像できるように、この作品を書くウルフの意識の中にはモンクス・ハウスとロドメルが存在していただろう。次の引用は、野外劇が始まる直前の様子を描いた場面である。

何列もの椅子、デッキチェア、．．．元から庭のものであるベンチがテラスの上に整列させられていた。誰のためにも席はたくさんあった。しかし何人かは地面に座る方を好んだ。確かにミス・ラ・トローブは「野外劇にうってつけの場所！」と言った時に真実を語ったのであった。芝生は劇場の床のように平坦であった。テラスは上り坂になっていて、自然の舞台をなしていた。木々が柱のように舞台に筋をつけていた。そして人間の姿は空を背景とすると大いに引き立って見えた。天気はどうかというのと、全ての予想に反して、非常に晴れた日になりつつあった。完璧な夏の午後に。

(Between the Acts 47: 外山弥生訳 77-78)⁽⁵⁾



『幕間』の朗読劇



ライティング・ロッジの窓から

ウルフのライティング・ロッジの窓からは広い芝生が見える。朗読劇もその芝生で行われ、そこを訪れた人たちは皆その芝生の上に座って、その劇を観たのだった。ウルフもかつてその芝生をながめながら、作品のシーンのイメージを膨らませたに違いない。そう確信させてくれるような、まさに「完璧な夏の午後」のひとつとさだった。

注

(1) “Sketch of the Past” (Moments of Being 所収) の翻訳は出淵敬子・塚野千晶訳「過去のスケッチ」『存在の瞬間』所

- 取、みずす書房)を主に利用させていただいた。
- (2) *To the Lighthouse* の翻訳は御興哲也訳を主に利用させていただいた。
- (3) *Mrs Dalloway* の翻訳は丹治愛訳を主に利用させていただいた。
- (4) モンクス・ハウスという名前からウルフはロマンチックな空想を抱いたが、実際は彼らの前の所有者であった Jacob Verrall が、ルイスにあるセント・パンクラス修道院との遠いつながりにちなんで付けた名前であるらしい (Rodnell 19)。
- (5) *Between the Acts* の翻訳は外山弥生訳を主に利用させていただいた。
- (6) この芝生でウルフや友人たちはボーリングを楽しんだ。Zoob はこの芝生を『The Bowling Lawn』として記している。(Zoob 15)

引用文献

- JEM Editorial. *Rodnell : A Downland Village*. Seaford : S. B. Publications, 1999.
- Lee, Hermione. *Virginia Woolf*. London : Chatto & Windus, 1996.
- Woolf, Virginia. *Between the Acts*. London : The Hogarth Press, 1990.
- . *The Diary of Virginia Woolf*. Ed. Ann Oliver Bell. 5 Vols. London : Penguin Books, 1979.

- . *The Letter of Virginia Woolf*. Ed. Nigel Nicolson. 6 Vols. New York and London : The Hogarth Press, 1979.
- . *Moments of Being*. Second Edition. Ed. Jeanne Schulkind. London : Hogarth Press, 1985.
- . *Mrs Dalloway*. London : The Hogarth Press, 1990.
- . *A Passionate Apprentice (PA) : The Early Journals of Virginia Woolf*. Ed. Mitchell A. Leaska. London : The Hogarth Press, 1990.
- . *To the Lighthouse*. London : The Hogarth Press, 1990.
- Zoob, Caroline. *Virginia Woolf's Garden : The Story of the Garden at Monk's House*. London : Jacqui Small LLP, 2013.
- ヴァージニア・ウルフ 『存在の瞬間』 出淵敬子他訳、みずす書房、1983年。
- 『灯台へ』 御興哲也訳、岩波書店、2004年。
- 『タロウエイ夫人』 丹治愛訳、集英社、2007年。
- 『幕間』 外山弥生訳、みずす書房、1984年。